

五人囃子

常磐津

全詞章

常磐津

中村重助 述

本名題『内裡模様源氏紫』

作曲者・初演年不詳

三千歳になるてふものよ、桃の節会の花見月、弥生の花のまた外に、綻びかかる生娘と、よい道連の艶男
お先揃へて花やかに、振り込め振り込む烏毛檜、奴島田に引きかへて、おぼこ娘の振袖に、浮れてふいと乗物を、背負ふ重荷も恋の道、おれこやぢや合点ぢや
石ごき酒の色上戸、酔にやなるまい女子の身そら、茶びんの役とはオヤ馬鹿らしい取合はせ、花の行列花道を、色香こぼして歩み来る
やれやれ二人とも、太義な事であつたわいの、今日は弟の光氏が、此別荘にて雛祭を幸、紫を呼び迎へての女夫事

夫はいな、其のお目出たに此の御所へ、あなたもお出の様子を聞き

私も態々おあと慕ふて来たのぢやわいな

イヤもう思ひがけない二人の都合ひで、送りの者を手伝ふて貰ふたが、二人ともにわしがあとを、慕ふて来たといふは偽り、大方光氏を見やうと思ふて、

アノココな浮気者めが

脊中打れて二人は莞爾

否々ありやうは此の美しい大内を、うつす模様を拝まうと

そんなら夫れ故二人とも

あいな、さうして又光氏様を蛩ではあるまいし、何でマア光る君と言のぢやへ

夫れそれその謂れ言てて聞かして下さんせいな

成程そりや古の光る源氏に倣ふてつけた弟光氏、そのあらましを話さうか、エヘンエヘン

そもそも五十四帖の巻の始めの桐壺と名づけしは、源氏の母君住ませ給ひし御所にして、その帚木より清らかに、光り輝く玉の御子、高麗国より渡りたる、

博士相して此君を、光る源氏と言伝ふ

何とこれで謂れが解けたで有らうが

そりや解くれども解けらぬはあなたの心

夫れそれ私が先へ心の丈を、モシ

恋の手習いつ書初めて、文してそして其の末の

末摘花の返す書、愚痴な繰言あどなきに、喰裂紙の縁結び

とけて逢ふ夜を神さんに、無理な願も恋の意地

料な

浮世ぢや

なあ

いい

かい

なあ

エエまんがちな何ぢやいいナ

つい紅筆で鼻紙へ、よふじをつけて送り船、浮れ浮船佃沖、吹けよ川風簾を揚げて、新地の端の夕納涼

それ夏瘦と引寄せて、癪がほだしの仮枕、膝を枕の爪弾に

淀の車は水故廻る、私や愠気で気が廻る、ほんに遺瀬がないぞへ

番ひ離れぬアノ鴛鴦を、見るにつけても思ひ出す、早く女夫になるならば、それこそよいよいぞへ

エエおかしやんせ厚皮な、調子合せて男には、合せ鏡の芸者の身

女庭訓今川に、それともや書てはありやせまい、お師匠さんの教へにも

ほんに女子は一生に、殿御といふは唯一人、眉毛落して紅鉄漿つけて、皆男故エエエエ

男へ皆心中立

あく性なあくしやうな気が知れぬ

都育ちは見目も姿もよい八重桜

八重が笑へば一重も笑ふ、アレ鐘の音に

宵の雨やれしほれしほしほ、一人戸口へとんと夜一夜

立明す、恋ぢやへ恋は仕勝と照業して、いつしか顔に紅葉の賀こなたも胸は篝火と、愠気の角の橋姫や、葵の上も今茲に、花を散らして争へり、義尚なほも押隔て

是はしたり二人乍ら、訳もない事其の争ひ、中に立た私も迷惑、然し差詰源氏の葵の上、後妻打をうつし絵は、ヲヲ幸弥生の鶏合、さらりと海へ須磨明石

それはいな、三人これから睦まし月

こぼれた花を追羽子に

時に取つての

春遊び

一イ二ウ三イ四五も口説の無理酒に

七ツ梅見の移り香とめて、憎い奴をば心に隠す

ここの辛さにまた嘘ばかり、問ふにや落いで

語るに悟る、エエあんまりなと

ひざり言

梅と桜と柳の緑、賑ふ弥生の花舞台、花の色幕、曙色は江戸紫の艶源氏、僅かな筆に

書とどむ